

期待したい有機茶栽培と 茶草場農法の一体的推進



＝ 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一 ＝

「静岡有機茶農家の会」の南條美和子さんから先日ご連絡をいただき、S O F I X 実践・事例研究会での「農家とともに、有機茶の栽培研究30年」と題する南條さんのレポートを拝聴した。

南條さんは、フリーランスの立場から環境と地域をテーマにしたプランニング・デザイン・プロデュースなどのクリエイションワークを手掛ける中、地元である静岡県下の有機茶農家と出会い、有機農業現場の支援に取り組むようになったという。1993年に農家と一緒に有機茶栽培の勉強を狙いとする「静岡有機茶農家の会」をスタートさせ、その事務局を担当。2003年には会の皆さんから「有機栽培茶研究家」の肩書をいただいたそうだ。

06年にイタリアのトリノで開かれたスローフードのイベントに招聘（しょうへい）され、農家と共に参加したのを手始めに、国内だけでなく海外でのプロモーションに力を入れている。筆者との出会いも、イタリア北部ピエモンテ州の中山間地域にあるヴァレーゼリーグレなる「有機農業村」で開催された日伊文化交流イベントに招かれて一緒にいたもので、以後、有機茶栽培の現場をご案内いただくなど、交流が続いている。

その南條さんのレポートによれば、有機茶栽培の研究にトライアルを続けて見えてきた農法は（1）微生物の働きを生かし、土壌の力を引き出す炭素循環農法（2）土壌の化学性を管理し、おいしさと栄養価を高めるための、茶の生態に合わせた化学的考察に基づく施肥管理——の二つが柱となる。

これにより、お茶特有の有機栽培の難しさ、すなわち▽他の作物にない独特の性質（酸性土壌に適応、遮光でおいしくなる光合成の矛盾など）▽芽が成長する前の段階で完成させ、収穫するという特性——を超えて、新しいお茶の世界を獲得しようとするものである。

栽培のポイントとしては、①生物多様性を重視するため、有機 J A S 法で許認可されている農薬類や B T 剤は不使用②施肥は炭素を中心とし、窒素は必要最低限にとどめるため、畜糞堆肥は不使用③有機栽培に不向きとされてきた品種「やぶきた」を100%使用——が挙げられる。中でもミネラル優先、窒素の後追いによる施肥管理の重要性和同時に、おから、米ぬかなど炭素率の高い植物性由来の発酵肥料の使用が強調された。ただし、こうした肥料資材の入手が困難になりつつあることにも触れられた。

南條さんを通じて入手した有機栽培茶による水だしは最高で、夏はいつもボトルに入れて持ち歩いているが、まさに30年にわたる研究・実践の蓄積が凝縮されていると実感する。そして肥料資材の確保が大きな課題であることに関連して思い浮かんだのが、世界農業遺産に認定された静岡の茶草場農法である。茶園の畝間にススキやササを主とする刈敷きを行う伝統農法で、ススキは10～20年かけて土に返るとされ、生物多様性の保全も相まって高品質な茶生産と美しい景観をもたらしている。

肥料資材としての茶草場の活用と同時に、土壌への還元効率を高めていく技術的工夫はできないものか。南條さんたちの研究でたどり着いた有機茶栽培と茶草場農法の距離は極めて近い、というのがレポート拝聴後に有機栽培茶を飲みながらの感想である。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫に入り、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、2013年11月より現職。



静岡有機茶農家の会の商品
「駿河天狗の養生煎茶」